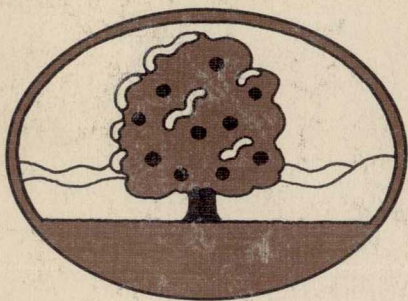
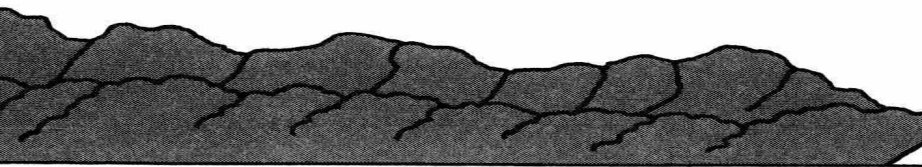


北杜夫全集——1



牧神の午後
少年

北杜夫全集—1



新潮社版

ぼくしん　ごご　しょうねん
牧神の午後・少年

〈北社夫全集 1〉

一九七七年一月二五日　発行
一九八一年一月二〇日　二刷

定価 一、二〇〇円

著者　北きた　杜もり　夫お

発行者　佐藤　亮　一

発行所　株式会社　新潮　社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六二)
電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一一
編集部 東京(〇三)二六六一五四一一
振替 東京 四一八 〇八番

印刷 株式会社　光邦
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

目次

初期詩篇

病氣についての童話

牧神の午後

狂詩

パンドラの匣

友情

少年

硫黄泉

為助叔父

指

人工の星

5

19

43

61

101

115

127

161

173

205

217

| | |
|---------------------------|-----|
| 霊媒のいる町 | 263 |
| 羽蟻のいる丘 | 279 |
| 薄明るい場所 | 289 |
| 岩尾根にて | 311 |
| 付録 『牧神の午後』 (冬樹社版) あとがき | 323 |
| 初出と収録 | 327 |

牧神の午後・少年

初期詩篇

目次

- あの頃の歌 7
成長 7
帰つて来るものに
穂高を見る 8
うすあをい岩かげ 9
優曇華 9
病葉 10
かげりゆく心に 10
黒い高原 11
- 美について 11
出発 12
絶縁状 12
漂流 13
細菌教室にて 14
人生 14
愚問 15
ある「わらひ」について 16
亡はれた神 16

あの頃の歌

雑草あらくさの中に日が暮れる。

たでが穂をゆり、

とほくとほく鳥が落ち、

ほろほろとけむりのあがる

籠の村に灯がともる。

胸の中は荒れはてたまんまだが

わづかに残つた心の隅の静寂は、

ゆふべの風にも戦たたかくし

ゆふべの靄もやにもしよんぼりする。

草の実のこぼれる頃の荒野あらのにも

こんな寂しがり屋はないやうだ。

成長

小鹿のやうにうひうひしく

はちらひとゆめのさなかに

ひとみををののかせてゐる少年よ

ひとり草むらにふしころんで

しなやかな四肢のうちがはに

ふしぎなときめきをおぼえてゐる少年よ

さてもうつくしいゆふべだが

みしらぬかげのゆれうごく

媚こぼにあふれた草の香りに

ああ 君はもう感じてゐるね

そだちゆく なやましさを

天上から墮ちた かなしさを

まあるい大地に満ちた むなしさを

ああ 君は感じてゐるね

さわやかにうつくしい少年よ

帰つて来るものに

おもひはしばしたたずむだらう

あの唐松林の 木屑のこぼれた切株に

煙る雨に ふくらんでゆく さ緑に

閑古鳥も 峽に呼びかはした そんなゆふがたに

あれもこれも とうに忘れはてた時——

そんな透きとほつた空が 嘗てあつた と

かうして 澄みきる空が 今あるにしろ

ゆつくりと 季節が いま野をめぐるにしろ

ためらひながらも 想ひ出すのは

小屋のゆふべに ほの白かつた樺の幹 と

見入つてゐた私の前で かすかにゆらいでみせた水の鏡

と

——ああ とほく消えて

再び帰ってくるに違ひないもの達——

つづりあはさう 一つの 私の物語として

ほのかに 淡々と

ためいきのやうに ゆらぐともし火のやうに

蒼くしづまりかへる夜空を截つた あの一筋の星の軌道

のやうに

やがて一つの 宵が 夜半が 訪れるだらう ひそやか

に

ひとしきり あの日々が あの影たちが
優しくかなしく 私をとりかこむだらう 白くかすみつ

つ

その夜 落葉が窓辺にささやいて

そのやうなくりかへしに 私は瞳をふせるだらう

穂高を見る

みなぎりわたる光の下、

山霊のひびきあふ壮麗の穂高を

動悸と共に俺は見た。

空はあくまでも透きとほつて

色彩は山巔に凝結する。

がつとそそり立つた大岩塊が

いま永劫の風化を展開する。

荒つばいタツチの稜線だが

それでゐて手のこんだ自然の造形。

あちらの尾根からぐいとおとしこみ、

こちらの孤峯に靄ともつかぬ 雲をまつらはせ、
谿間々々はべつとりと残雪の化粧だ。

——あの鋸齒にただよふ山氣こそ
解体による結晶を示してゐるな。

——あの山巒にひそむ息吹きこそ
悩みを通した歎びをうたつてゐるな。

おれの魂はいつしか この展望をむさぼる一点となつて
天と地との境界にわなないた。

みなぎりわたる光の下、

ただ壮麗の岩峯に

山靈は蕭々とひびきあふ。

うすあをい岩かげ

ものおともたえ

ひかりもまだらに

かぜもよどみきる

みしらぬうすあをい岩かげに

ひつそりといだきあひ

ひとみにひとみを映しては

とほい神話のなごりに酔ひ

こころのさびしさに燃えたつては

いたいけな息のほめきに

ふと あらあらしく

つつましいくちびるをうばひたい

優曇華

今宵——何か知らないが

しつとりとした心の黙従がある

古びたヴェランダのにぶい燈に

ささやかな山の夜の静謐がある

ふと 音もなく訪れた

かほそい生命のひとゆれ——

金の眼を持つ草花のかげろふである

山精の産む透きとほつた粹人である

淡白な寂しさが

うるほつた夜氣にたゆたひ

いつ知れず 黒ずんだ電燈の傘に

伝説に染まる優曇華の花が揺れてゐる

見つめてゐる私の内奥へ

何処までも沈んでゆく思念がある

ひそやかな虫類の営みの中にも

しづかに更けてゆく黙従がある

病わくら 葉は

絶間のない律おきての

しづかにめぐる林の奥に

枯れ沈んだ色を眺め

死にかかった木の葉の

冷たい和声を聞いてゐる。

いかなる故郷も宿らない

やつれはてた 私の内景

うるはしい自然の循環から

ぼつりと除かれた私の外景

枯れ沈んだ想ひの中に

林は金の葉を蒔まき散らし

私は癒いしがたい病葉わづらひとなつて

安らひもなく震へてゐる。

かげりゆく心に

ゆふべになつたなら さまよふがよい

消えようとする光を捜すかのやうに――

つめたさを沈めた くさむらの中を

色褪せた風の 生あれてゐる中を――

昏れのこつた峽せまの空に

たえだえのうるほひを惜しむかのやうに――

鳥影と余光の慕はれる

ゆふべが訪れたなら さすらふがよい

すたれゆくさまさまの姿を

胸のふかみに抱きしめるかのやうに――
あをざめふるへるものかげの中を
音とならぬつぶやきの息づく中を――

さびれゆく希みのやうに　さまよふがよい
かげりゆくたましひのやうに　さすらふがよい
沁み入るうつろさを信ずるかのやうに
溶けあふ想ひに浸りきるかのやうに――

黒い高原

黒い高原に霜がきて
放たれてゐる大きな馬がひとり暴れる
糸のやうな三日月を背景に
たてがみを乱し前足を高くあげ
見えない騎手を振り落さうと躍りあがる
岩は凍る前の表情に白み
草は死ぬる前の息つきに細らみ
そのため大きな馬の悍は針のやうに鋭くなり
動くものもない黒い高原に

憑かれたごとく荒れ狂ふのである

美について

月もない真暗闇のなかを
うつくしい白い豚の群が通つていった
あとからあとから際限なくつづいていった
いつもはおどけた動物だが
このときはたいへんもの悲しく
ひと筋の白い流れのやうにすぎていった

毎夜

だんだんに織重なつた夢路から
僕はさまざまの美を吸ひとつた
ところが
さて目ざめてみると
なぜか僕はひどく痩せはそつてゐるのです

出 発

少し顔をしかめて

ひよこひよここと奇妙な足取りで

しやれたドライブ・ウェイを歩いて行つた

ありきたりの展望なんぞ

惜しげもなく黙殺してやつた

「気がかりなのは あの赤屋根です

邪魔つ気なのは 幼い日々の代物しろものです」

道端に

「誰も通るべからず」の立札があつて

その上に止まつた赤トンボの眼玉に

水色の空がくるくる廻はり……

「役立たずの想ひ出には おさらばしよう

齒ごたへのあるもののみに 焦れよう」

僕の行手には

誰も見たことのないふしぎな風景が

冷たさに満ちて うす蒼く続いてゐた

絶 縁 状

——目に浮ぶ遍歴者に代つて——

此処まで来たことは来たのです。

この私が、

頑是なかつた私が、

皆から可愛がられてゐた私が——。

幾分蒼ざめてはゐますけれど

罪の匂ひさへ吸ひこんで

不気味に熟しかかつてゐるのです。

いたいけな魂を虐げながら

今日の私のむさぼりは終りました。

西天に紅色が滴り

身震ひするやうな祝祭の裡に

私は足を休めてゐます。

年齢の分からぬけつたいな面貌に

うす笑ひを刻んで突つ立つてゐます。

歯のきしるやうな

歯のきしるやうな

流水の嚙み合ふやうな

然もどす黒く鬱血したとめどない遍歴です。

そこらぢゆうのにんげん方よ

笑へますか？

泣けますか？

こんなにも冷たく熱く堪へがたい絶境は

少なくとも人間らしい理念にはありません。

あなた方の脳細胞の領域から

この紊乱は遙かにかげ離れて居りませう。

ああ 心身をむしばむ 惑乱と放肆と恍惚と……

しかし歌つたりはしますまい、

表情ひとつ変へますまい、

君子人の唾は甘んじて受けませう。

もつともつと病み尽すため

やがて出発です。

さよならです。

それでは何時の日か

前代未聞に孕み尽して

お目にかかる事もありませう——。

漂 流

小つちやな舟に寝ころがって

私は あをい海原を漂つてゐる

星くづが間近く額にかぶさる夜には

大きく瞳を睜いて

とほい懐しい風景をそつと想つてみる

泣かうとしても

とうに涙は洒れてしまつた

灰色の波頭がたかく碎ける日には

とめどない悔が私の心をしめつける

どんな思想も 価値も 栄光も

私にはもう要らない

ただ可愛らしい子供になつて

陳腐な守唄に寝かされたい

それゆゑ 破れかけた帆をあげて

むかし私の住んでゐた 星くづの沈む海の涯に恋こかれる

のだ

それにしてもこの小舟は

知らず知らず どうしても逆さまの方へ流れてゆく

まあるい空の下のひとりぼつちの漂流！

その空に 滙しない唇が織られ……

ああ 私は泣いてゐるやうだ

やうやく涙がよみがへつてきたと言ふのか

夕焼雲が色褪せる頃になると

帆柱につかまつて私は昏れてゆく海原を見つめる

すると美しい波のうねりが

ふしぎに優しく 私の小舟を揺りあげるのだ

細菌教室にて

此処は細菌教室だからバクテリアがうようよしてゐる
のも尤もな話だ 培養器の中に点々とコロニーを作つた
ペスト菌チフテリア菌 さては血液寒天に溶血現象を起
してゐる葡萄状球菌連鎖状球菌 人間たちは白衣に身を
包んでおつかかなびつくり 無闇と白金耳を炎で焼き ク
レゾール液をあちこちぶちまけ 見えない細菌共に大恐

慌の御様子 ところで僕は教室の中央にでんと足を投げ

出し 相も変らぬ白っぽい夢想にふけりながら そろぞ

ろ這ひずる結核菌丹毒菌を 平氣の平左で吸ひこんでゐ

る 實際この心を蝕ばむ二十世紀の不可解な細菌類に比

べては お前ら陳腐なバクテリア共よ 勝手に僕の何処

なりと齧るがいい 魂からして腐りかけてゐるこの僕

が お前らを恐れる必要がどうしてあらう それはさて

おき傍らのレフラー培地では ゼフテリア菌がぬらぬら

毒素を吐きつづけてゐる

人 生

夢のやうな少女でした と

貴方はたしかに書かなかつたか

夢にしては汚なすぎた と

貴方はたしかに想はなかつたか

何かに酔ふと みんなは夢を見て

覚めれば 大きな嘔をする